

自他の瞑想実践としての Devatānussati に関する一考察

井 上 ウ イ マ ラ

はじめに

Devatānussati (天随念) は、仏随念、法随念、僧随念、戒随念、捨随念に続いて六随念の最後に位置づけられており、神の徳を鏡として自らの信・戒・聞・捨・智慧などの徳について繰り返し念ずることで一時的に貪瞋痴を離れることができると説明されている。そこではまた、六随念は聖者に勧められる修行法であるとも説かれている。

六随念に関する先行研究では、主として通俗的な在家のための実践から発展したと見る吉元信行¹⁾らの研究と、それを採らない松田慎也²⁾の研究などがある。これらは三帰依と聖戒からなる四不壊浄と、布施、持戒、生天の三論とを中心とする修道論の視点から見た六随念の形成発展に関する概観的考察であって、具体的な実践内容に踏み込んだ議論はほとんどなされていない。

本稿では、パーリ文献に伝えられる天随念の瞑想的実践内容を確認し、自他を見つめる瞑想実践としての位置づけを確認した上で、後にさまざまな仏菩薩が登場する糸口となった実践としての意味合いを探りたい。

1. 天随念の瞑想実践としての概観

1.1. 『清浄道論』における説明概要

天随念に関して、『清浄道論』では Aṅguttara Nikāya の「マハーナーマ経」を引用しながら次のような説明がなされている。

次に、天随念を修行しようと欲する者は、聖道の力によって獲得された信仰心などの人徳を具備して修行すべきである。それから、人のいないところに行って独居して、『四大王天の神々がいる、三十三天の神々がいる…それ以上の神々がいる。信仰心を具備したその天人たちは、ここから死滅して、そこに生じた。私にもそのような信仰心がある。戒を具備したその天人たちは…、見聞を…、手放す実践を…、智慧を具備したその天人

(230) 自他の瞑想実践としての Devatānussati に関する一考察 (井 上)

たちは、ここから死滅して、そこに生じた。私にもそのような智慧がある』と、このように天人たちを証人の立場に置いて、自らの信仰心などの人徳を繰り返し思い出すべきである³⁾。

具体的に天随念が実践される過程は次のようにまとめられる。

1. まず具体的に神を想起する。
2. その神がそこに生じる原因となった信仰心、戒、見聞、手放す実践（捨）、智慧などの徳を想起する。
3. 自分自身にも神の徳と同じような信仰心などの徳があることを繰り返し思い出す。

天随念では神々について呼称やイメージを使って想起するだけではなく、神々の持つ徳に等しい自らの人徳を思い出すことが特徴となる。自他の視点の併用である。神について瞑想して神秘的合一体験に埋没して超越的存在者への依存関係を生み出すことがないようにするための配慮であろう。自分自身にも神に等しい人徳が備わっていることを思い出すことによる喜びや自信に支えられて、神々と共に生きつつも神々に依存せずに自らを浄化してゆく道が開けるものと思われる。

1. 2. 「マハーナーマ経」における説明形式

「マハーナーマ経」では、マハーナーマの「尊師よ、成果を得て教えを知悉した聖なる弟子は、どのような過ごし方で多くを過ごすのでしょうか（Yo so bhante ariyasāvako āgataphalo viññātasāsano, so katamena vihārena bahulaṃ viharati⁴⁾）？」という質問に、ブッダは六随念を答える。「成果を得て教えを知悉した」という形容から「聖なる弟子」は解脱した聖者を意味すると理解される⁵⁾。そこで、天随念に関して以下の解説がなされる。

マハーナーマよ、聖なる弟子が自らの、そしてかの天人たちの信仰心と戒と見聞と手放す実践（捨）と智慧とを繰り返し思い起こす時には、心は貪欲にとりつかれていない、怒りにとりつかれず、無智にとりつかれていない。その時、彼の心は、神々を対象として、まっすぐになっている。マハーナーマよ、心がまっすぐになった聖なる弟子は、意味を洞察することができ、法を感得することができ、法によってもたらされる喜びが得られる。喜びする者には歓喜が生じる。意識に歓喜ある者の身体はリラックスし、身体がリラックスすると安楽を感じる。安楽なる者の心は安定する⁶⁾。

ここで、意味が直観的に洞察される場合には「私」という主観的観念に基づいた意識の中で意味の深い理解体験が起こり、法が直観的に感得される場合には「私」という主観的観念を超えたレベルで現象のつながりが実感されるのではな

いかと思われる。

上記のプロセスは六随念の瞑想実践に共通する心理的過程である。

1.3. 禅定の深さに関する説明

このように天随念によって心が集中し鎮まってゆく過程を『清浄道論』は次のように説明する。

その時、心は貪りにとりつかれていることがなく、怒りに…無自覚さにとりつかれていることがない。その時彼の心は神々に関心を向けながらまっすぐになっている。このように前述したのと同様にして心を覆うものが排除されて一瞬のうちに禅定を支える要素が生起する。しかし、信仰心などの徳が深遠であるため、あるいは種々の内容の徳を繰り返し想起することに心を傾注させるため、完全な没頭には至らず、没頭に近い状態の禅定となる⁷⁾。

「マハーナーマ経」では「心が安定する」と説かれていたが、『清浄道論』はその集中が完全に没頭した禅定でないことを明記している。その理由として、対象となる神々の徳性の深遠さや、想起すべき徳の多様性が挙げられている。完璧な禅定による集中状態に入れないほどに複雑な対象を取り上げた理由は、禅定に付随する神秘的合一体験を防ぐためではないかと推測される。

1.4. 天随念の実践が勧められた対象

次に、六随念が聖なる弟子に向けて説かれた修行法であることに関して、『清浄道論』では次のような理由が説明される。

また、これら6つの繰り返し思い起こすことは聖なる弟子たちにのみよき結果をもたらす。なぜならば、彼らには仏法僧の徳が明らかになっているからである。また彼らは、破れたところがないなどの徳のある戒、穢れなく惜しむことのない手放すことの實踐、大威力のある天人たちの徳と等しい信仰心などの人徳を具備しているからである⁸⁾。

ここでは、聖なる弟子ではない場合には六随念が成就しない可能性が明示されている。仏法僧の徳が明らかになっておらず、戒や捨にも欠けたところがあり、神々と等しい人徳も獲得されていない凡夫の場合には、超越者との神秘的合一体験に埋没してしまう可能性が高いからである。

一方、六随念が推奨された「聖なる弟子」には心の穢れを清める必要があることから、彼らは阿羅漢に至っていない有学の聖者であると考えられる。解脱の階梯についての定型句的な説明を含む中部の「希望経」⁹⁾などによれば、有身見 (sakkāyadiṭṭhi)、戒禁取見 (sīlabbataparāmāsa)、疑 (vicikicchā) という3つの束縛を超えて預流という解脱の第一段階に入る。その疑のなかに仏法僧の三宝に関する疑

(232) 自他の瞑想実践としての Devatānussati に関する一考察 (井 上)

いが含まれている¹⁰⁾。預流に達して聖者になることは、ブッダと神々に関する疑いを超えて、神仏の混同を避けられるようになることでもあった。

また同経によると、不還においては貪りと怒りとがすでに超越されていることから、不還の聖者は貪瞋痴から一時的に解放されるという「マハーナーマ経」などの記述には一部そぐわないところが出てくる。以上の考察から、六随念が推奨された「聖なる弟子」は、解脱しても未だ貪瞋痴の残りのある預流、一來の聖者ではなかったかと思われる。

ブッダは、神仏の混同を超越した聖者たちに対して、在家・出家の区別なく、六随念の修行を勧めていたのである。

2. 六随念における自他の視点

六随念の対象を自他という視点から分類すると、仏法僧の3対象は他の徳についての考察、戒と捨の2対象は自らの人徳、天随念は自他の諸徳についての考察という構成になっている。

天随念では、神々の徳と自己の徳を繰り返し思い起こすことによって、自他という視点へのこだわりが緩められ、「私」や「神」という観念への依存傾向を超越するための準備作業が促進されるのではないかと思われる。それはまた、日常生活において自他意識を巧みに使いこなし、神々を含めたあらゆる衆生たちと不必要に依存し合うことなく共生できる心を育むものであろう。

表1 自他の視点から見た六随念の対象

他という外にある対象	自という内にある対象
①仏徳, ②法徳, ③僧徳	④戒, ⑤捨
自他・内外にある対象	
⑥天人や自分の徳	

しかし、法は外にあるものだけではなく、自らを構成し、自らの内に見出されるべきものでもある。また、聖者にとって僧は自らを含む集団としてより身近に感じられるようになるであろう。

さらにまた、自らの中に仏性を見出すという視点、誰彼を問わず戒や手放す実践の素晴らしさを思うという視点を含めるようにするならば、六随念のすべてが自他の視点から実践可能なものとなる。

このようにして自他あるいは内外という視点から瞑想を深めてゆく実践的アプローチのきっかけとして、六随念の最後に天随念が配置されているのかもしれない

い。

また、このように自他や内外という 2 元論的な対立を止揚してゆく射程をもつ ヴィパッサナー瞑想¹¹⁾ への基盤として六随念による集中力の養成が説かれる意味¹²⁾ も理解される。

3. 多様な仏菩薩創出への窓口としての天随念

『清浄道論』における六随念の説明の最後には、凡夫に対しても六随念を修行する効果が述べられている。

そうであったとしても、清らかな戒などの人徳を具備している凡夫も心がけるべきである。繰り返し思い起こす力によって、ブッダなどの徳を繰り返し思いこす人の心は澄み切ってくるものであり、その威力によって心の覆いになるものが除去され、大きな喜びが生れ、そうしてヴィパッサナーに励んで阿羅漢の解脱を自らのものとすべきである。たとえば、カタンダカーラに住んでいたブッサデーヴァ長老のごとくである。この長老は、マーラが化作したブッダの像を見て、『貪瞋痴のあるものであってもこれほど輝くのであるから、本物のブッダは貪瞋痴を離れているのだからどれほどであろう?』と考えて、ブッダを対象として歓喜を得て、ヴィパッサナーを進めて阿羅漢に至ったという¹³⁾

この記述における、「マーラの化作したブッダの像」が何を象徴しているのかは興味深いテーマである。仏教美術の登場や大乘仏教における多様な仏菩薩の登場は、上座部からするとまさにマーラの化作物であったのかもしれない。

このブッサデーヴァ長老の場合には、ブッダの貪瞋痴を離れた徳性を随念することによって喜びを得て、そこからヴィパッサナーに転換することができた。しかし、ブッダの徳と神々の徳とを峻別することに大きな意味を見出せない凡夫の場合はどうであったろうか。神秘体験によって触発されたイメージやそこから展開する宗教的物語に没頭して仏教と類似した宗教的概念体系を創出してゆく道へ一步を進めてゆくことは身近なものではなかったかと思われる。

まとめ

Devatānussati は、ブッダ在世当時から実践されていた瞑想法であり、修行者たちと生活世界を共にしていた神々の諸徳を鏡として自らの人徳を見つめることで心を浄化する方法として、聖者に勧められていた瞑想法であった。

ところが、神とブッダとを明確に見分けることに重きを置かない人びとが Devatānussati を試みた場合、自らの好む神々の名称やイメージなどを瞑想対象として禅定を得て、それに伴う神秘体験に入り込むこともあったであろう。彼らが

(234) 自他の瞑想実践としての Devatānussati に関する一考察 (井 上)

そうした神秘体験から出た後で、親愛の念を抱く神を新しいブッダや菩薩として創作してゆく活動を開始していったとしても不思議ではない。こうした意味合いで、Devatānussati は、仏随念との関連の中で大乘仏教の諸仏・諸菩薩の出現を準備する可能性を開くものでもあったと言えるであろう。

第3章で紹介した「マラーの化作したブッダの像」が具体的に何を意味し、仏教史上のどのような流れを象徴するものであったかに関しては今後の研究課題である。

-
- 1) 吉元信行「六随念の成立過程」『印度学仏教学研究』第18巻第1号, 1969. pp.177-180.
 - 2) 松田慎也「随念論の発展について」『印度学仏教学研究』第27号2号, 1979. pp.176-177.
 - 3) Buddhaghosa, *Visuddhimagga* PTS. 1920. p.225.
 - 4) *Anguttara Nikāya* Vol.III. PTS. 1896. p.284.
 - 5) 注釈書によると、マハーナーマは「預流がよりどころとする過ごし方を問うてみよう」と思って質問したと解釈されている (Buddhaghosa, *Manorathapūraṇī* III PTS. 1966. p.337. を参照)。しかし、本論では、經典の関連記述のみを取り上げて「聖なる弟子」の内容について吟味してみたい。
 - 6) Ibid. pp.287-288.
 - 7) Buddhaghosa, *Visuddhimagga* PTS. 1920. p.225.
 - 8) Ibid. p.226.
 - 9) 片山一良訳『中部根本五十経篇 I』大蔵出版, 1997. p.106.
 - 10) 水野弘元『仏教用語の基礎知識』春秋社, 1972. p.252.
 - 11) 中部第10経である「念処経」には、あらゆる対象を内 (*ajjhatam*)、外 (*bahiddhā*)、内外 (*ajjhata-bahiddhā*) という3つの視点から繰り返し見つめることが説かれている。片山一良訳『中部根本五十経篇 I』大蔵出版, 1997. p.166 を参照。
 - 12) 松田は「当初は信仰を媒体とする修道論であったものが次第に定の修道論へと集約されていったもののようと思われる」[松田 1979. p.678]、吉元は「六随念は、出家道としての信勤念定慧の五無漏根における念として、慧のひとつ前の段階である定を得るための実践道となるものである」[吉元 1969. p.180] と述べているが、ともに禅定の深さについての吟味は為されていない。
 - 13) Buddhaghosa, *Visuddhimagga*. PTS. 1920. pp.227-228.

〈キーワード〉 天随念, 六随念, 仏随念, 自他, 聖者

(高野山大学准教授)